

ホステリングマガジン vol.43 / 2025 Winter

JAPAN
Youth Hostels, Inc.

H

ostelling

Magazine



COVER INTERVIEW
小島よしお
「スキマ」にあるもの



この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





さあ、おいしさと
でかけよう!



ランチパック

これだって サステニヤブル!

普段、何気なくやっていることにも、
サステナブルなことがたくさん。

スマホの明るさは
適切に。



お湯は少なめ、
半身浴。



ペットボトルは
ラベルをペリッと。
外でも、分別。



ペットボトルは
飲みきって空っぽに。



ボトルは資源!
サステナブルボトルへ

日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟 (Hostelling International) や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

こどもはおとなに。
おとなはこどもに、
なれる場所。



- 02 Cover Interview
小島よしお
「スキマ」にあるもの
- 08 Youth Hostel Pick up
大阪国際ユースホステル
楽しみ方は無限大！
多彩な体験が詰まった
国内最大級のユースホステル
- 12 Hostelling Magazine × 地球の歩き方
ヨーロッパの小さな大国
ルクセンブルク
- 16 鉄道写真家 櫻井 寛「列車で行こう！」
- 18 松島むうの晴れときどき旅びより
- 20 YH-GUIDE ユースホステルガイド
長野県 / 岐阜県 / 愛知県 / 三重県 / 滋賀県
京都府 / 大阪府 / 兵庫県 / 奈良県

※本誌の情報は2025年12月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会 編集・発行人 寺島 真

TEL.(03)5738-0546 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



PROFILE |
芸人
小島よしお(こじま よしお)

1980年11月16日、沖縄県生まれ。千葉県出身。早稲田大学教育学部在学中、コントグループ「WAGE」でデビューし、2006年よりピン芸人として活動。「ユーキャン新語・流行語大賞2007」では「そんなの関係ねえ」がトップ10を受賞。近年は年間150本以上の子ども向けライブをこなすほか、絵本などを通して子どもたちへの発信を続けている。2024年には長男が誕生し1児のパパに。近著に「小島よしおのボクといっしょに考えよう」(朝日新聞出版/2023年)『最強無敵の雑草たち 10歳から学ぶ 植物の生きる知恵』(家の光協会/2023年)など。

Hostelling Magazine Cover Interview

「スキマ」にあるもの

Yoshio

Kojima

環境を変えて、新しい道を拓く 雑草のように、自分の呼吸しやすい場所へ

—2007年に「そんなの関係ねえ」で大ブレイクした小島よしおさん。現在も子どもたちに大人気で、イベントはすごい盛り上がりだとネットニュースにもなっていましたね！

—時期は死亡説が流れたり、3年連続で「来年、消える芸人」に選ばれたりもしましたけど、そんな時も「大丈夫大丈夫！」と言い続けていたら、本当に大丈夫になったみたいですよ。言葉ではないけど、ポジティブな言葉を口にする、環境が良い方向に変化することってありません？「学校に行けなかったけど、小島さんのギャグで救われた」といったファンレターをいただくこともあって「みんながハッピーになるんだったら、言い続けていこう！」と、20年近く言い続けています(笑)。

—もう“ギャグの域”を超えていますね(笑)。子どもたちにこれほど人気がある理由を、ご自身ではどんなふうに分析していますか？

ずばり、子どもに人気の理由は「動き」と「裸」と「筋肉」、それに「勢い」じゃないですかね(笑)。子どもたちの熱量は舞台でもすごく感じます。特にお祭りとか地域のイベントなんか呼んでいただいたときは、普段から仲のいい友達同士で見に来てくれるので、最初からものすごい熱量です(笑)。

—子ども向けのイベントのほかにも、YouTubeチャンネル「小島よしおのおっぱっぴー小学校」だったり、子どもたちにフォーカスした活動を始められたのには、どんな思いがあったんですか？

僕は、雑草の生き方にすごく背中を押してもらったんです。雑草は、ライバルが多いところには行かず、石垣やコンクリートの「スキマ」を狙って花を咲かせます。目の前に壁があっても、それを乗り越えるのは大変。だったら「横から行く」。別に壁を越えなくても、結果として花が咲けばいいじゃないかと、そんな生存戦略なんです。

例えば、お笑い芸人だったら「明石家さんまさんの番組に出て、自分の持ちギャグでめっちゃウケる」みたいな、高い壁を越えたときの気持ち良さはあって。それを追い求めることはあると思うんですけど、僕にとってはその壁を超えに行くのは、ちょっと苦しいんです。これまでもお笑い芸人が並ぶトーク番組に出演させていただいて、結果を残せず傷ついて帰ってくるということが何度もあって…。「ああ、あの有名な先輩は、自

分の今の年齢の時には、もうバリバリやっていたんだよなあ」と考えると、同じように壁を乗り越える姿がまったく想像できなかったんです。そんな時に雑草の生き方を知って、あまりライバルがない子ども向けの活動をやってみたら「自分に合っていた」。結果としてそこは、自分が呼吸しやすい「スキマ」だった。そんな感覚なんです。

—そんな小島さんご自身はどんな子どもだったんですか？

目立ちたがり屋でしたね。学級委員長をやったり、応援団長をやったり、家で見たコント番組のモノマネをクラスでやるような子どもでした。

—お笑い芸人になるキッカケは何だったんですか？

大学生になって、どこかの芸能事務所のオーディションを受けようと思っていたときに、早稲田大学のお笑いサークル「WAGE」のメンバーだった岩崎う大さんにスカウトされて、舞台を見学に行ったら、めっちゃ面白くて。「この人たちと舞台に出たい！」とお笑いサークルに入ったのがキッカケです。

—岩崎う大さんって、お笑いコンビ「かもめんたる」の、う大さんですよ？う大さんにスカウトされたなんてすごいです！

それが、後でわかったんですが、勘違いなんです(笑)。う大さんは客として僕を誘っただけだったみたいで…。当時の僕はタンクトップで筋肉出して、髪型はアフロ。サークルの雰囲気全然なじまないタイプの奴が「僕、スカウトされて来たんで」みたいな感じで入ってきたので(笑)。僕の知らないところで「なんであんな奴誘ったんだ？」と言われてたみたいです。

—人生何が転機になるかわからないですね(笑)。WAGEはその後、岩崎さん・小島さんを含めた5人組コントグループとしてデビュー。2006年に解散した後は、苦しい時期もあったそうですね。

苦しかったですね。WAGEでデビューしたときはまだ大学生で、周りから「学生なのにテレビに出てすごいじゃん！」と言われていたのが、就職した同級生に「あれ？まだ芸人やってるの？」と言われるようになってくるんです。それまで飲み会の幹事を率先してやるようなタイプだったんですけど「最近何やってるの？」と聞かれるのが怖くて、学生時代の友達とは距離を取るようになって。先輩芸人の家の近くに引っ越して、芸



人仲間と毎日一緒にいることで、なんとか自分のメンタルを保っていた気がします。

—そんなつらい下積み時代があったんですね…。

当時は WAGE でやってきたことを全部捨てて、自分にできることを必死に模索していました。「諦めるな。何でもいから応えろ」と無茶ぶりにしてくれる先輩芸人に、全力で応えていた当時のノートには「もう狂気になるしかない」と書いてあります(笑)。そうやって無茶ぶりに応える日々の中で少しずつ形づかれていったのが、今の芸風なんです。

「そんなの関係ねえ」も、ある日先輩に誘われたクラブイベントで、リハーサルのマイクテストを「ラップでやれ」と無茶ぶりされたときに、とっさにクラブミュージックに合わせて「そんなの関係ねえ」と連呼したら会場が沸いて！「それいいじゃん！」って(笑)。本当に先輩に作ってもらった芸風だと思っています。

—そういう温かい先輩を引き寄せる力が小島さんにはあったともいえますよね！

きっと、ずっと一緒にいて、言われたことを何でもすぐやっていたので、先輩からすると「面白い奴」とか「あいつ何でもやるからかわいいな」と、思ってもらえてたんじゃないかな。その

関係が作れたから、いろいろアドバイスしてもらえたのかも知れないですね！

英語を習得する道のりは 「白地図に色を塗る」ようにコツコツと

—小島さんは「実は旅好き」と伺いました！今まで行った中で特に印象に残っている旅の思い出を教えてください！

子どもが生まれる前に妻と2人で行ったカリブ海の島国・バハマの旅は印象に残っています！エグズマ諸島の島々を巡るツアーに参加したんですが、その島の中に野生のブタが暮らす無人島があるんです。元々、食用として持ち込まれた豚が野生化したらしいんですけど、けっこう大きい豚が浜辺にいっぱいいて、一緒に泳いだり、ご飯をあげたりして、面白かったですね！同じバハマでは「サメと泳げるツアー」もあったんですが、それはさすがに怖くてやめました(笑)。

あと、夫婦でイタリアに行ったときの話なんですけど、ある朝カフェに入ったら、店員のお兄さんがおそらく彼女らしき人が来たときにレジを抜けて話し始めて。忙しい時間帯で、ほかのお客さんも注文を待っている感じだったんですが、店員さんはまったく気にせず、彼女との会話を楽しんでいるんです。そして並んでる人たちも全く気にしてないんです。「ゆったりした感覚を持った国民性なんだな」と思いましたね。僕がトイレに



行ってる間に妻がナンパされてた、なんてこともあって、慌てて「おい、そろそろ行こうぜ」って声をかけたことも(笑)。日本を離れて、そうした文化や感覚の違いに触れると「もっとのんびり“スキマ”を楽しむような感覚を持たなきゃいけないな」と気付かされますね。

—違う文化圏の人々から学ぶものは多いですね。以前、アメリカ人をルームメイトに迎えて、英語を勉強していたとも聞いたのですが、本当ですか？

本当です。子どもの頃から「いつか英語をしゃべりたい」という夢があって。英会話教室に通ってみたり、独学で勉強したりもしたんですけど、結局「ネイティブの人と一緒に住むのが一番いい」と聞いて、ルームメイトを探すことにしたんです。「ルームメイト募集！家賃はタダでいいので、英語を教えてください！」という感じで探していたら、知人のついで、日本の子どもたちに英語を教えているニューヨーク出身の方とつながったんです。

—すごい行動力！「家賃タダ」は魅力的かもしれませんね！

当時僕は先輩芸人ともルームシェアしていたので、1回面接というか同居メンバー全員で顔合わせをしたんです。でも、日本人は誰一人として英語をしゃべれず、彼の言っていることが全然わからなくて(笑)。「うーん、何を言っているかはわかんないけど、まあいいんじゃない？」というノリで、ルームシェアが始まりました。後で聞いたら、彼がニューヨークのご両親に「日本でこの人たちと住むことになった」と紹介したとき、僕がパンツ一丁でネタをやっている動画を見たらしくて…。ご両親がものすごく心配していたそうです(笑)。

—それは心配になるかも…(笑)。ルームメイトと一緒に暮らすことで、英語は上達しましたか？

そうですね！上達できたと思います。ただ、よく「留学したら、ある日を境に急に英語が聴こえるようになった！」なんて話を聞きますけど、僕はどちらかというと、少しずつルームメイトの英語が聞き取れるようになったという感じ。本当にちょっとずつ、白地図に色を塗り足していくイメージで「あ、トイレはBathroomって言うことが多いな」とか「I want to～はI wanna～とも言うんだ！」みたいに、実際に話して、通じるようになった表現を1個1個増やしていく。その積み重ねでした。

—英語を身に付けるのは簡単じゃないんですね…。

筋トレを休むと筋肉が贅肉になっちゃうのと一緒で、英語も話さなくなると鈍っていっちゃうんですね。だから、本当に英語を身に付けたいのなら「英語のある環境」に常に自分を置くことが大切だと思います。僕の場合は、ルームシェアが終わった後も近くの外国人観光客が集まるバーに通って、英語で話しかけたりしていました。相手は旅行者だから毎日入れ替わるので、同じ単語を使って同じ話を何度でもできるし「恥をかいてもその時だけだから」という安心感もあったんです。会話のスピードが速くて「全然聞き取れないな～」というときもありましたけど、その時は笑ってごまかして(笑)。そのうち、バイリンガルの常連さんとも仲良くなって、会話の輪に自然に入れるようになっていきました。今は海外に行っても、現地のタクシーの運転手さんやお店の人と普通にコミュニケーションがとれるくらいには保っている感じです。「世界中どこへ行っても、何とか通じ合える」という感覚は、大きな自信になったし、気分的にもいるんなところに行きやすくなったと思います。

人との予期せぬ出会いが醍醐味 「スキマ」を楽しめる旅をしてほしい

—「言葉の壁」以外にも、道に迷うかもしれない、怖い思いをするかもしれない。その上お金もかかる、と旅をするのに心理的なハードルを感じる人も多いと思います。そんな、まだ旅に躊躇している人に、小島さんならどんな言葉をかけますか？

こういう雑誌のインタビューでは答えづらいんですけど、旅が好きでも嫌いでもどっちでもいいと思うんです。「家にいるのが好き」という人もいると思うので。ただ「自分は旅が好きじゃない」という人も、行ったことがないならまずは一度、旅に出てみてほしいですね。行く前から「自分は旅が苦手」と決めてしまうのではなくて「試しに1回行ってみよう」くらいの気持ちで。実際に行ってみないとわからないことって、たくさんあるんですよ。

僕は旅の醍醐味は、観光地そのものよりも「人との出会い」だと思っているんです。たまたま同じグラスポートに乗り合わせた人、立ち寄ったレストランの店員さん、乗り物の運転手さんと

か、どんな人と出会えるかは本当に行ってみないとわからないし、未知数なんです。未知数だからこそ「旅って面白い」と思うんです。ただ言葉で説明するのも難しいので、1回行ってみて「やっぱり違うな」と感じたら、それもひとつの答えだと思うので。

ただ、別に海外とか遠くでなくてもいいんですけど、最低でも3泊くらいできる旅がいい気がします。いつも思うんですけど、1泊だけの旅って慌ただしいスケジュールになりますよね。本当に「行って帰るだけの旅」になってしまう。その土地の良さに触れて、人との出会いを楽しむのなら、最低でも3泊くらい。ちょっとした「スキマ」がある旅にしたほうがいいと思います。

—ユースホステルはまさに「人との出会い」が詰まった宿泊施設なので、ぜひ初めての旅で使ってみてほしいです！最後に小島さんがこれから行ってみたい旅先や、やってみたいことを教えてください！

スペインのサグラダ・ファミリアが完成したら見に行きたいですね！あとは、スウェーデン、フィンランド、デンマーク。北欧が好きなので、子どもがもう少し大きくなったら、家族で行ってみたいです。実は今年家族で北欧に行こうとしたんですけど、少し前に行った韓国旅行のフライトでも子どもがギリギリだったので…。

—小島さんはヨーロッパがお好きなんですね！…ちょっと意外かも(笑)。

デンマークは幼児教育が進んでいる国なので、実際に自分の目で見てみたいんです。あと「フォルケホイスコーレ」という、大人のための学校に友人が通っていて、その子にも会えたらと思っていて…という真面目な理由は実は「後付け」で(笑)。自分でも不思議なんですけど、百貨店でやっている「北欧フェア」のような催しがすごくしっくりくるんです。「なんかデンマークに行ってみよう」という直感から始めて、いろいろ調べて旅に出る「理由」をつくるぐらいの旅が好き。最初は「完璧な計画」じゃなくて、ちょっと「スキマ」があるぐらいの旅が、ちょうどいいんです。



読者プレゼント

抽選で 小島よしおさん直筆サイン入り色紙1名様にプレゼント!

ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用お申し込みフォームから！

<https://jyh.jp/hm> 

応募〆切:2026年2月末日

※当選者にはご応募時にご登録いただいたメールアドレス宛にご連絡いたします。
①jyhからのメールが受信できるように設定をお願いいたします。